

「末期がん患者を自宅で支える力、その人らしさを支える力」

末期がん患者が自宅で最期まで過ごす時に望む医療、介護を考える

医療法人社団めぐみ会 南大沢メディカルプラザ

介護支援専門員 宮崎 民世

## 1.はじめに

現在、死因のトップである癌。2人に1人は癌になるという、決して他人事ではない時代となっている。どこで最期を迎えたいかと問われれば、「できれば自宅で家族に見守られながら逝きたいと」答える方も多い。しかし誰かを自宅で看取るという経験をしている人は少なく、家族も「果たして自宅で最期まで看とる事が出来るのか？」と不安を抱き迷われる方も多い。

癌を患い、最期を自宅で迎えたいと本人が希望されたとき、その人らしく自宅で過ごして頂くためには何が必要で何が大切なのか。ケアマネジャーとして関わった癌末期の方の事例を通し、携わった医療、介護の内容を報告する。病院での医療と在宅医療の違いについて、ケアマネジャーとしての気づき、本人や家族の希望、満足感、不安悲しみなどについて考察した。

## 2.事例

ケアマネジャーとして関わった癌末期の方の事例

A様 70代 男性 妻と2人暮らし 住宅街の一軒家にお住まい

傷病名：膵臓癌 肝転移 肺転移

大学病院にて膵臓癌治療中であったが、肝転移、肺転移をきたし腫瘍増大のため食道静脈瘤より出血、同病院に入院。入院中に膵臓癌末期であること、余命1~2ヶ月であることを医師から本人、妻に説明をされた。本人「一日でも早く退院して自宅で過ごしたい」妻も「できれば自宅で看取りたい」と夫婦で希望された。介護保険申請を行い、退院後どのように過ごしたいかを伺いながら、介護用ベッドを自宅一階に搬入。愛用のソファを2階から1階へ持ちおろすなど環境を整備した。退院と同時に、訪問診療、訪問看護、訪問薬局にて医療の支援を開始。また近隣病院の緩和ケア病棟に妻が面接し、自宅療養困難となった場合に備えた。病状、痛みなどの進行、ADLの低下などあり、車椅子、室内手すりの手配、訪問歯科、訪問理美容、妻の負担軽減のための訪問介護の調整など行っていった。訪問看護では排便コントロールや入浴の支援など行うとともに、状態に応じ相談、緊急時の訪問を24時間体制で支援。訪問診療では排便のコントロールや痛みの調整、熱発対応など医師が週1回診察。薬の内容や病状や今後の見通しなどについても本人の希望により丁寧に説明あり。疼痛をコントロールした上でせん妄や身の置き場のない辛さが持続するなら鎮静剤を点滴で使用することも本人家族に説明された。鎮静剤の使用については状態によりタイミングを本人、家族と相談し決定することとしていた。退院3か月経過したころ、本人念願だった花見にも介護タクシー利用し実現した。その後衰弱、息切れ有、在宅酸素使用開始、褥瘡予防マットレス利用開始、医師より余命週単位と妻に伝えられた。また「看取りのパンフレット」を本人家族に渡し説明された。本人より「自分の状態とあっている、医師からこういう説明を受けるのは良いと思う」など話しがあつた。その後約2週間後状態悪化にて鎮静点滴開始、家族に看取られながら永眠された。永眠後、リビングにたくさんの花を飾り家族でお別れの会をされている。本人が事前に望まれたことであつたとのこと。この事例を通し、末期がん患者が自宅で最期まで過ごす時に望む医療、介護を考える

### 3.考察

<本人、家族の不安悲しみ>

退院時「一日でも早く退院して自宅で過ごしたい」妻も「できれば自宅で看取りたい」と決めた時には夫妻で涙をこぼしながら話したと妻より聞いた。余命が1~2ヶ月であることを受け入れるためには「これから夫婦でゆっくりしようと思っていたのに。」「なんで自分が癌になったのか」などいろいろな思いがあった。(キュープラー・ロス 氏の受容過程の5段階)

<本人家族希望、家族の気持ち>

○自宅で最期まで過ごしたいのは

人間関係：妻と一緒にいたい。家族に会いたい。自分の時間を自由に使いたい、来客と会いたい。

環境：ベッドも自分で選びたい、愛用のソファを利用してくつろぎたい

清潔面：口の中や髪の毛も清潔にしておきたい。摘便はしてほしくない、ポータブルトイレは利用したくない、着替えは朝食前にしたい。

趣味：読書をしたい。パソコンを使いたい。

医療：病状をききたい、薬も説明を受けて選びたい、痛みをコントロールしてほしい。

死後：家族に手紙、思いを残したい。葬式は家族でしてほしい。祭壇はなくてよい。

○自宅で過ごした満足感（妻より）

環境：病状や状態の変化に合わせて希望する福祉用具などすぐに手配してもらえて助かった。

訪問看護：励まされ、いろいろ相談出来てよかった。

訪問診療：丁寧に説明を受け、病状も納得することが出来た。

人間関係：自分がずっとそばにすることが出来た 本人やりたいことが出来た

<病院と訪問診療の違いについて>

病院は治療が目的であるので医師は治すことに全力を注ぐが、自宅での診療は本人、家族と向き合い、希望を聞き、その人の生活に合わせた診療を行っている。癌の方以外でも訪問診療を行っているが、医師が来ることを心待ちにしている方も多い。医師が自宅で話をよく聴いてくれ、不安なことや希望することなど高い壁なく話せるからではないだろうか。

<訪問看護について>

自宅に訪問してくれる看護師は、医師と連携しながら緊急時には24時間体制で対応してくれる。本人や家族の気持ちを察しながら対応してくれる心強い存在である。

### 5.まとめ

今回の事例の方は、本人と持ちの通じ合った妻がおり、経済的にも恵まれていた方だと思う。ケアマネジャーとして今まで関わってきた方々の中には、病状の悪化が早く支援がはじまってすぐにお亡くなりになった方や、家族の介護力不足で自宅での療養がかなわなかった方もいる。

自宅で末期癌の方が最後までその人らしくいる為には、この事例のようにキーパーソンとなる家族の存在が大きい。また病状の進行を予測しそのスピードに対応した医療や看護、環境の整備の対応が必須と思われる。その中で、対応していくチーム全体で本人、家族の不安、疑問、悲しみ、満足感などに寄り添って接していくことが重要だと思う。

今後、様々な状況の方々に携わっていく中で、本人と家族の思いが合致しているか、医療支援が本人の希望と合致しているか、迅速に環境整備を行えているか、など常に考えながら、本人家族と支援する側が円滑なコミュニケーションを取りあい、連携し本人家族を支えていくことが大切であると考えます。